

世界の文明と都市

都市とは、人々が日々の糧を収穫する「土地」から離れ、商業や工業などの専門化された職業を営みながら集い暮らす場所のことである。ヨーロッパの都市文化は、古代ローマ帝国衰亡のあと、暗く長い中世の眠りから覚め、14世紀に始まるルネッサンスの光のなかで開花したものと言われる。多くの優れた音楽や絵画などの芸術が生み出されたのは、まさしくこうした都市であった。しかし、ヨーロッパのルネッサンス以降をあたかも世界の都市の歴史として捉える人がいるとすれば、それは間違いだ。

人類の古代文明には、それぞれの文明の中心地となる都市が栄えたといわれる。エジプトにはテーベ（現在のルクソール）やメンフィスが、メソポタミアにはウルやバビロンが、インダスにはモヘンジョダロなどの都市が栄えた。いずれの都市も紀元前3000～2000年くらいの時期に建設された。つまり人類の都市文明は今から4、5千年前に遡ることになる。

残念ながら、これらの歴史的な都市の多くは、その都市が支えた文明の衰退とともにやがて打ち捨てられ、現在は「遺跡」として残っているのみである。しかし、古代からの長い歴史を持つ都市で、現在に至るまでずっと住み続けられている、稀有な歴史都市もある。それがダマスカスである。

複雑に歴史が重なり合う都市

シリアの首都ダマスカスは、地中海東岸からレバノン山脈を越えたあたりに広がるシリア砂漠に位置するオアシス都市である。ダマスカス市の中心部の近くには、城壁によって囲まれた古い歴史的な旧市街地がある。ここは細い街路が網の目のように張り巡らされ、袋小路のような行き止まりの多い迷宮のような場所である。これは地中海の周辺に立地する多くのイスラム都市に共通する特徴ともいえる。

しかし、ダマスカスはイスラム都市と言い切れない側面がある。ダマスカスが長い時間の流れの中で、複雑に歴史が重なり合っているからだ。なぜダマスカスはそれほどまでに複雑なつくりなのだろうか。

歴史の町・ダマスカスの成り立ち

ダマスカスの近隣にあるテル・ラマド遺跡から紀元前6500～6000年ころの銅製品が出土し、この頃にはすでに人が住んでいた形跡が見られる。その後、盛衰をくりかえしながらもダマスカスは現在に至る。継続的に人が居住してきた都市としては、世界最古であるとされる。

ダマスカスが都市として確立されるのは、アラビア半島の遊牧民アラム人が「ダルメセク」（「よく灌漑された場所」の意味）を建設した紀元前12～10世紀と言われる。紀元前334年に始まるアレクサンドロス大王の東方遠征の結果、シリアが制圧され、ダマスカスはギリシャの支配下に置かれる。さらに、紀元前1世紀にはローマに併合され、ダマスカスはヘレニズムやローマ文化の重要な中心となった。

このころのダマスカスは『新約聖書』にも登場する。キリスト教を迫害していた人が、急に目が見えなくなり、主の導きにしがたって、ダマスカスの「まっすぐな道」に住む人のもとに行ったら目が見えるようになり、それを知った使徒パウロが回心する。紀元34

年頃といわれ、その後パウロはキリストの教えを布教するべく世界を歩くことになる。この「まっすぐな道」は、ダマスカス旧市街の真ん中に今でも存在する。

者・カリフの座につき、以降、安定した世襲王朝が確立されていく。こうしてダマスカスはウマイヤ朝(661～750年)の首都となり、スペインからインドにいたる巨大な帝国の首都として栄華を極める。ダマスカスの旧市街の中心部にあるウマイヤ・モスクは、現存するモスクとしては最古のものの一つである。

以降、シリアはさまざまな王朝の支配下におかれたが、ダマスカスはイスラム都市の性格を維持しつつ現在に至る。

繰り返された都市再構築

旧市街の骨格ができたのはギリシャ支配下の紀元

元前1世紀ころといわれる。その大きさは東西約1.5km、南北約1kmの楕円形をなし、周囲を城壁に囲まれている。外敵の侵入から守られる城内には君主や総督の居城、軍隊の駐留地などが置かれた。ダマスカスの城壁は、ローマ時代には長方形の幾何学的な形をしていたが、12～13世紀に再建されて現在の楕円形に至る。城壁の高さは場所によって2mに達する。

城外との出入り口となる城門は、15世紀には全部で9つあったといわれ、現在ではそのうち2つが失われ、7つが現存している。旧市街を東西に貫く「まっすぐな道」の東端にあるシャルキー門は、ローマ時代から残り続けている唯一の城門といわれる。

FLAVOR OF CIVIL ENGINEERING INHERITANCE

土木遺産の香

第54回

住み続けられた最古の都市「ダマスカス」

(シリア・ダマスカス)



日本工営株式会社
コンサルタント海外事業本部/開発事業部副事業部長
山田耕治
YAMADA Koji

年頃といわれ、その後パウロはキリストの教えを布教するべく世界を歩くことになる。この「まっすぐな道」は、ダマスカス旧市街の真ん中に今でも存在する。

イスラムの勃興

古代ローマ帝国が衰亡したあと、この地に湧き起こったのがイスラム教である。7世紀初め、アラビア半島に生まれたムハンマドが創始したイスラム教は、紀元630年にメッカを拠点としてアラビア半島を教化し、巨大なイスラム帝国をつくり上げた。しかしムハンマドの死後は、スンニ派とシーア派が分裂し、後継者争いを繰り返した。7世紀後半になると、ダマスカスに拠点を置くウマイヤ朝がイスラム国家の指導



ダマスカスの市街地

格子から網の目になった道路網

ギリシャ・ローマ時代のダマスカスは、現在よりも太くまっすぐな格子状の道路により区画が切られていた。格子の間隔は東西が45m、南北が100mだそうだ。中央西側に神殿がおかれ、東側に広場(アゴラ)があり、両者を繋ぐ列柱道の一部は今でも片鱗が見られる。東西に走る「まっすぐな道」は「ダクマヌス」と呼ばれる大通りで、ここに面して円形劇場が立地していた。

旧市街の北西の角には、ギリシャ・ローマ時代から城砦があり、ここに総督の館や軍事施設が置かれた。一般に城砦は敵の来襲に反攻しやすい場所にあり、加えて高台の見晴らしと水が豊富であるこ

とが必要とされる。ダマスカス旧市街の北西角地もそういう条件を備えた場所といえる。

旧市街の西側には、ギリシャ・ローマ時代には古代神殿がおかれていたが、ビザンツ時代(東ローマ帝国が栄えた4～6世紀ころ)になると、神殿の半分はバシリカ教会として再建された。さらにイスラム時代になると、古代の神殿全体が接収され、新たに巨大なモスクとして再建された。これが現在のウマイヤ・モスクである。

ギリシャ・ローマ時代のアゴラ(広場)はその後につぶされ、おもにキリスト教徒が住む居住区になった。このあたりの道路が細く曲がっている。これは碁盤目の広い道路が通っていなかったアゴラの部分に、

後代になって住宅が建て込んでいったからだ。

市場と居住区

城砦のすぐ南側の通りは、旧市街で最もにぎわう市場(スーク)である。通りにはアーケードが掛かり、その薄暗い空間には雑貨から土産、香水や食べ物まで、さまざまな商店が軒を連ねている。ウマイヤ・モスクに繋がるおよそ500mがスーク・ハミディーヤと呼ばれる賑やかな商業空間となっている。

スークの賑わいとは裏腹に、隣接する居住地はひっそりとしている。イスラムの文化は居住地によそ者の侵入を嫌う傾向が強い。その意味で古代の広い道路の格子のネットワークは、イスラムの居住地の道路としては使い勝手が悪い。道はむしろ狭く曲がり、枝分かれし、ところどころ行き止まりになっていた

ほうが良い。ギリシャ・ローマ時代の広く格子状の街路は、イスラム化していく中でだんだん狭められ、ところどころで閉鎖され、居住者にとって心地良い閉ざされた街区が作られていった。ダマスカスの都市はこのようにして、古代ギリシャの都市の明確で大作りな骨格の上にイスラム都市の細く迷宮のような街路が作りこまれるなど、歴史の重層の中で雑な街へと変貌を遂げたのである。

イスラム都市の近代

歴史の波にもまれながらも、その後、ダマスカスはイスラム都市として発展していく。16世紀になると、シリアはオスマン帝国の支配下におかれ、ダマスカスは地方の中核都市として、あるいはメッカ巡礼の基地として栄える。19世紀後半から20世紀初頭のダ

ある日本人都市計画家の足跡

歴史都市ダマスカスに足跡を残した日本人都市計画家がいる。番匠谷莞二がその人だ。番匠谷は東京工業大学の清家清の研究室で建築を学び、卒業後パリのエコール・デ・ボザールに留学。その後、国連開発計画(UNDP)の専門家としてダマスカスに赴任することになり、1968年にはフランス人のエコシャールとともにダマスカスの都市計画を立案した。こうした時期に、一人の日本人が海外の歴史的首都の計画に携わったというのは意外な事実だ。

番匠谷のダマスカス・プランは斬新なものだった。東京やパリで都市の拡大・発展を目の当たりにしていた番匠谷にとって、モータリゼーションの進展に対する都市改造は、これから時代を生き抜く都市の必須要件と映ったのではないだろうか。

番匠谷は、ダマスカスの都市の外縁部に広域街道のバイパス機能を持つ高速道路を配置する計画を立案した。この高速道路は実現し、ダマスカスの交通ネットワークの重要な路線となっている。

番匠谷の都市改造は旧市街にも及んだ。市壁に囲まれ、狭い道路が迷路のようにつながる旧市街であるが、西側地区に自動車交通に対応し、街路を広げて歴史的街区を整備し、「まっすぐな道」を拡幅整備するという大胆な計画が立案され、その一部は実現に移された。

歴史的資源の保全を大原則とする現代の都市計画ではちょっと考えられない計画ではあるが、時代の要請が異なる今の時点のものさしで安直に批判すべきものではないだろう。番匠谷の足跡を追うように、ダマスカスの都市計画は日本の技術協力の対



① ダマスカス旧市街図(文献[2]、[4]を基に作成)
 ② イチゴを売っている旧市街近くの市場
 ③ まわりより高く石垣で囲まれた旧市街の北西端に位置する城砦
 ④ 石積みが見えるウマイヤ・モスク東側の街路
 ⑤ ローマ時代の石積みの遺構が見えるウマイヤ・モスク西側の商業空間
 ⑥ 夕方から賑わう旧市街近くのスーク

⑦ ウマイヤ・モスク西側のスーク(市場)
 ⑧ スークの出口付近のウマイヤ・モスク西側の石積みアーチ
 ⑨ ローマ時代からの姿を残す「まっすぐな道」の東端にあるシャルキー門
 ⑩ スークで衣料を売る店
 ⑪ ウマイヤ・モスクの正面
 ⑫ ウマイヤ・モスクの内部
 ⑬ ウマイヤ・モスクで講話を聞く人々
 ⑭ 人の流れが途切れない夜の旧市街のスーク

マスカスは、地域における政治・軍事の中心地としても重要な都市となる。

1900年にはスエズ運河に対抗し、ダマスカスが起点のアラビア半島を縦断するヒジャーズ鉄道が建設されるなど、インフラが整備され、市街地も拡大していく。今でもオスマン帝国時代の面影を残すダマスカス駅が保存されている。新たな市街地は旧市街地の外側に広がった。

ローマ時代の水道

ダマスカスは砂漠の中のオアシス都市と書いたが、これは西に広がる標高1,500mほどのレバノン山脈から流れ出るバラダー川がダマスカスを潤している

からだ。バラダー川はダマスカスの西の郊外で7つの支流に分かれ、そのうち2つ、バーナース川とカナワート川が城壁に囲まれたダマスカス旧市街に流れ込む。これがダマスカス旧市街の水道である。

この水道はローマ時代(紀元4世紀ころまで)に整備されたが、その起源はアラム人の時代(紀元前10世紀ころ)にまで遡るともいう。その後、7世紀以降のイスラム時代にも維持され、14世紀には旧市街の主要な都市施設に直接、水が供給されていた。水を多く必要とするハンマーム(公衆浴場)はもちろんのこと、礼拝前に手足や口腔を洗うために水が必要な大モスク、街角の給水栓などに水が届けられた。

象となっていく。番匠谷が技術協力の先駆となったわけである。

世界文化遺産

古代都市ダマスカスとも呼ばれるダマスカスの歴史的地区は、1979年にユネスコ世界文化遺産に登録された。

すでに見たように、ダマスカスは地中海東岸域の交易路に位置し、古代からギリシャ、ローマ帝国、ウマイヤ朝、オスマン帝国などさまざまな民族・国家の支配を受けながら発展してきた。歴史が地層のように重なり合ったダマスカスには、さまざまな時代の文化・文明が折り重なる。

今日のダマスカスは、城壁で囲まれた古代から続く歴史的都市と新市街の複合都市である。現在のダマスカスの人口は約200万人、都市圏全体では400万人に迫るといわれる。歴史を生きつつも、徐々に近代の首都としての顔も整備しつつある。

<参考文献>
 1) 『都市計画の世界史』日端康雄 2006年 講談社現代新書
 2) 『シリア・オアシスに持続する世界最古の都市文明』新井勇治(『イスラム世界の都市空間』陣内秀信・新井勇治編 2002年 法政大学出版会)
 3) 『イスラムの都市世界(世界史リブレット16)』三浦徹 1997年 山川出版社
 4) 『ダマスカスの建物分布に隠された秩序』伊藤香織(『トルコ・イスラム都市の空間文化』浅見泰司編 2003年 山川出版社)
 5) 『シリア国際協力の先人 建築家・番匠谷莞二』松原康介(『アハバル・カシオン』JICAシリア事務所 2007年1月、7月)

<写真>
著者